慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サミユエル・ベエリイのリカアドオ批判 : 価値の本質、尺度、並に原因の問題に就いて
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.1 (1929. 1) ,p.141- 176
JaLC DOI	10.14991/001.19290101-0141
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290101-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を先驗的に形式と素材に分ち、又事實として形式と素材の統一性、即ち社會生活の一元論を主張する彼の社會哲學の必然的歸結として、經濟現象の認識條件として、社會的法的考察法を主張した點にあるのであつて、經濟現象の目的論的考察は決して本質的影響を與へはしなかつた。何んとなれば、現代に於ける社會的法的經濟學派の最大の理論的代表者カール・ディールは經濟學の目的科學たり得る事を否定して居るからである。（六）

筆者は他の機會に於て、シュタムラーに依つて暗示せられた社會的法的經濟學說がシュトルツマン並にディールに依つて如何に、發展されたかを論じやう。

（一）Rechtsphilosophie. § 25. N. 1.

（二）{ebenda. S. 56. / Rechtswissenschaft. S. 32.

（三）vgl. W. u. R. S. 336 337.

（四）ebenda. S. 348.

（五）Rechtsphilosophie S. 105-106.

（六）vgl. K. Diehl. Theoretische Nationalökonomie Bd. I. S. 17 ff.

サミュエル・ベエリイのリカアドオ批判

——價値の本質、尺度、並に原因の問題に就いて——

永田清

一

リカアドオの價値論は、相對意義に於ては勞働價値說であるが、嚴密に云へば生產費說である。蓋し單純なる勞働價値說より出發したる彼は（註一）、やがて、綿密周到なる推敲を經たる結果、明白率直に價値を決定する原因が決して勞働の一あるのみでない事を認むるに至つたからである。即ち屢〻引用せられるマカロック宛の書簡（一八二〇年五月二日附）の一節に「この問題（價値論）に就て爲し得べき最善の考慮を盡したる後、予は貨物の相對價値の變動を來し得る原因が二つあることを信ずるものである。第一に貨物の生產に要する相對的勞働量、第二に斯〻る勞働の成果が市場に搬出せらるゝ迄に經過すべき相對的時間がそれである。固定資本に屬する一切の問題は、此の第二の規則の下に屬する……。」（註二）と云ひ、又同六月十三日の書簡に「若し拙著の價値論の章を再び書くとすれば、予は貨物の相對價値を左右する原因は一でなくて二なること、即ち該貨物の生產に必

要なる相對的勞働量と、資本が眠れる時間及び貨物が市場に搬出せらるゝ迄の時間に對する利潤率とであることを認める」（註三）と明言して居るのである。

『經濟學及び課稅の原理』第三版が現れたのは、かゝる推敲を重ねたる後の一八二一年早春の頃であつた。リカアドオは意の如く其の價値論の稿を改むるの遑を有しなかつたけれども、猶ほ「困難なる價値の問題に關する意見を前版に於けるよりも一層充分に說明せんことを試み、又その爲め第一章に若干の增補を加へた」（註四）とその序文に述べて居る。事實、第一章は舊版に比して余程面目を改めた。彼は舊版に、社會發達の初期に於て單に貨物の交換價値は勞働量によつて、若しくは一に（solely）勞働量に由つて定まると言つたのを、殆ど專ら（almost exclusively）その各個に費されたる比較的勞働に依つて定まると改め（註五）、舊版に於ては五小節に分てる同章を七小節に分ち（註六）、就中勞働價値法則が固定資本の使用と流動資本の回轉の遲速との爲めに修正されなければならぬ理由を說明することが更に詳細を加へた。斯くして、リカアドオは利潤も亦勞働量と相並んで貨物の交換價値を左右する原因たるものであると云ふ結論に到達して居る。

斯くの如く、リカアドオは、生產完了に要する時間或は利潤が、投下勞働量と相並んで別に貨物の價値を左右するの原因たることを說明するに甚だ努めたけれども、價値原因としての二者の重要性の輕重如何と言ふ時は、投下勞働量の遙かに重くして、生產に要する時間の要素の輕きことを明言して憚らざるものである、且興味あることには、單純なる勞働價値論者マカロックと、初めより勞働價値說の反對者であつたマルサスとに對するリカアドオの態度が、その議論の語調に於て相異つて居るのである。即ち前述せし如く、既にマカロックに對しては、價値決定の原因が決して勞働量の一ならずして、是と生產物の市場搬出に要する時間との二なることを反復力說したが、マルサスに對しては、勞働價値說の最も眞理に近く、利潤の變動より生ずる價値の變動の甚だ輕微にすぎざることを切言して居る。即ち一八二〇年十月十日附マルサス宛の書簡に於て、彼は次の如く述べて居る、「貴下は『僅少なる例外の外、貨物に投ぜられたる勞働量は是等のものの相互交換せらるゝ比率を決定すると謂ふ予の主張は根據充分ならず』と謂はれた。予も亦、嚴格なる意義に於て、その眞ならざることを認むるけれども、其は、予の知る限りに於ては、相對價値測定の尺度として最も眞理に近きものであると考へる。貴下は需要供給が價値を左右すると云はれるけれども、前述したる理由に基き、此は無意義であると信ずる。價値を左右するものは、供給そのものは、比較的に生產費に依て支配せられ、貨幣に現はれたる生產費は、勞働の價値と利潤とを意味する。今假に予の貨物と貴下の貨物とは同價値であると假定すれば、その生產費は同一でなければならぬ。然るに生產費は、多少の差はあらうが、投ぜられたる勞働に比例する。予の貨物も貴下の貨物も共に其の價値一〇〇〇磅であり、從つて二者は恐らく各〻同量の勞働の體現せられたものであらう。この學說は、之を、比較せらるゝ諸貨物の絕對價値測定の用に充てずして時々相對價値上に起る變動の用に充つるときは、極めて眞理に近きものである。是等の變動は如何なる永續的原因に之を歸すべきであるか。二個の原因に、而して二個の原因のみに歸すべきである。其效果重大ならざる一原因は、貨銀の騰貴若しくは下落、或は予の畢竟同一事なりと認むる利潤の下落若しくは騰貴

であり、極めて重大なるも一つの原因は、諸貨物生産に要せらるゝ勞働量の大小である。この第一の原因からは大なる結果の生ずることはないであらう。蓋し利潤其者は、價格中の一小部分を成すにすぎずして、その爲めに大なる增減が起り得ないからである。然るに第二の原因の作用は無限である。諸貨物の生産に要せらるゝ勞働量は變動して二倍三倍することあるべきを以てである」と（註七）。而して曩にマカロックに對しては彼の『原理』に於ける價値論の章を書き改め度いとの意思を披瀝したるリカアドオが、マルサスに向つては、「予の『原理』第一章は大に變更せらるゝことはないであらう。原則上に於ては全然變更の余地なしと信ずる」（註八）と述べて居る。彼は又、『原理』第三版に於ても、利潤の變動より生ずる價値の變動は、其效果の比較的輕微なることに留目しなければならぬと謂ひ、「諸貨物の價値變動の原因を評定するに當ては、勞働（の價値）の騰貴若しくは下落の爲めに起る結果を全然考慮せぬことは失當たるべきも、大に之を重要視することも、亦た同じく正しくない」（註九）と論じて居る。猶ほ且、リカアドオは、一度價値論の章を出ると、價値變動の一原因たる時間の要素を忘失したるものの如くに、價値の變動は生産上に要せらるゝ勞働量の變動に基くと云ふ單純なる勞働價値論を以て、その立論の基礎として居る。故に相對的意義に於て、彼の價値論を勞働價値說と稱するのは、この意味に於て正しい。又第一章價値論に於ける重大なる修正と後章に於ける單純なる勞働價値說とは、決して其の間に理論の不一致の存するものではなく、且價値論以外の章に於て、貨物の價値は單に費用勞働量に由て決せらるゝものの如く說いたのは、彼の不用意、輕忽に出でたものでなくして、熟慮の結果なることを認めなければならぬ（註一〇）。リカアドオ自身『原理』第一章に於て豫め斯う斷つて居るのである。――「本書の今より後の部分に於ては、……予は、貨物相對價値の上に起る大なる變動は、皆な之を、其時々其生産に要せらるゝ勞働の多少より生ずるものと見做すであらう」と（註一一）。之と同時に、リカアドオは、前述せし如く、原理上投下勞働量と相並んで利潤の價値決定要因たることも確認して居るから、彼の價値論を嚴密なる意義に解して、生産費說と謂ふのも異論の余地がないのである。

以上の如きリカアドオの價値論の研究に於て、思索の發展過程を時間的に繹ねることは、極めて興味あり、且肝要なことである。殊に、リカアドオ自身、自己の價値論に充分滿足し得たか如何うかの問題は姑らく措くとして、今日の學者にして、經濟學上の價値論は既にリカアドオ之を解決したりと說くものあり、假令斯る所說に服せずとするも、猶ほ現在の經濟價値論が依然として生産費說に半ば解決の鍵を求めて居る以上、筆者は特に其の價値論の再吟味の必要を信ずるものである。事實、之を祖述するにもせよ、修正するにもせよ、或は攻擊するにもせよ、兎に角十九世紀の經濟學的思索の基礎となつたリカアドオの學說に就ては、多くの權威になる諸研究が多數發表されて居る。特に彼の思索發展の跡を繹ねたる名著名論文としては、彼にディール、ホランダアあり、我に小泉教授がある。好んで異を立つるものに非んば、大體に於て此等研究の結論以外に到達することは不可能であらうと思はれる。從つて、筆者は他の方面からリカアドオの價値論を研究して見やうと試みた。リカアドオは、價値なる名辭に、盛るに如何なる內容を以てしたか、果してその意義は前後一貫し、觀念の混同に陷りたるが如きことは皆無であるか如何うか。若しありとすれば、之を如何に解釋し、

如何に決定すべきか。斯くる問題を焦點とするリカアドオ價値論の研究が、本稿の目的であり、骨子である。是に於て、筆者はこの問題を研究の視野として、リカアドオ自身の爛熟期になりたる『原理』第三版に由り、再度彼の價値論を吟味しなければならぬ。

註

一　「地金銀の高價」McCulloch, Ricard's works, p. 263. Constancio 佛譯版 p. 402.
「穀物低價の資本利潤に及ぼす影響に關する一論」マカロック版　三七七頁、コンスタンチオ佛譯版　五五一頁

二　Hollander, Letters to McCulloch, p. 65.

三　Hollander, Ibid., p. 71.

四　小泉教授譯「經濟學及課稅之原理」（岩波文庫版）六頁、マカロック版三頁、コンスタンチオ佛譯版三頁

五　小泉教授譯同書九頁、マカロック版一〇頁、コンスタンチオ佛譯版七頁

六　リカアドオの『原理』各版の比較に就ては、小泉教授「リカアドオ原論の本文」（三田學會雜誌二十一卷九號）參照

七　Bonar, Letters of Ricardo to Malthus, pp. 175-176.

八　Bonar, Ibid., p. 177.

九　小泉教授譯同書三一—三二頁、マカロック版二四頁、コンスタンチオ佛譯版二七頁

一〇　Hollander, op. cit., p. 110.

一一　小泉教授譯同書三二頁、マカロック版　四頁、コンスタンチオ佛譯版二七頁

二

リカアドオの價値論は、アダム・スミスから出發して居る。即ち彼はスミスの言を引用して斯う述べて居る。——「『價値なる語は二つの異なる意義を有して、或時は或特定物の利用を言ひ現し、或時は其物の所有に由て取得する、他貨物購買の力を言ひ現す』ことは既にアダム・スミスの着目した所である。『一は之を使用上の價値、他は之を交換上の價値と稱し得べきものである』。スミスは續けて謂へらく、『使用上の價値最も大なるものが交換上の價値を有すること僅少若しくは皆無なることが屢々であり、又反對に、交換上の價値最も大なるものの使用上の價値が僅少なるか皆無なるかのことがある』。……されば、利用は交換價値に取つて絶對的に缺くべからざるものではあるが、（事實上、效用と交換價値とは必ずしも並行しないから）前者は後者の尺度ではない」（註一）。

「既に利用を有するものとすれば、諸貨物の交換價値は二個の泉源より生ずる。即ち貨物の稀少性からと之を取得せんが爲めに要する勞働量からとである」（註二）と。

斯くして、リカアドオは貨物を大別して二種類とする。人力を以て其存在量を增加すること能はざるものと、人の努力に依て其量を增加し得べく、且つ其生產上に無制限なる競爭の行はるゝものとがそれである。前者にあつては、價値の源泉は其稀少性である。骨董品、稀覯書、古錢、釀造高に限りある特殊の葡萄酒の價値の如きは、是に由て說明される。併し日常賣買せらるゝ貨物の大部分は後者に屬するものである。「されば、貨物を論じ、其交換價値及び相對價格を支配する諸法則を論ずるに當つては、吾人は常に人間の努力によつて其數量を增加し得べく、且つその生產上に競爭の制限なく作用するが如き貨物のみを意味するものである。社會發達の初期に於ては、是等諸貨物の交換價値、即ち交換上一貨物の幾許が他の貨物に對して與へらるべきかを決定する規則は、殆ど

專らその各個に費されたる比較的勞働量に由て定まるものである」（註三）と。

以上の所論に於て、リカアドオは經濟上の價値を以て交換價値と考へ、其を他物購買力と規定して居る。これがリカアドオに於て最初に表はれる交換價値の概念である（註四）。

アダム・スミスも、原始社會に於ては、生産上に費された勞働が交換價値決定の「唯一の事情」であつたことを認める。併し土地の私有、資本の蓄積が實現せられた後の社會に於ては、一貨物の交換價値は、其生産に參加した勞働、土地、及び資本に對する平均賃銀、平均地代及び平均利潤の合計に由て決せられ、市場に於ける現實價格は此合計額を引力中心として廻轉し、而して、斯くして決定せらるゝ價値を測定すべき最良尺度は其貨物と交換せらるゝ勞働量であると云ふのが、スミスの意見であつた。リカアドオはスミスの説を以て一貫を缺くとなすものである。「貨物の現在又は過去の相對價値を決定するものは、勞働が生産すべき諸貨物の比較的數量であつて、其勞働に對して勞働者に與へられる諸貨物の比較的數量ではない」（註五）と謂ふのである。

價値の現實的規定として、リカアドオのここに云ふ「相對價値」とは、勞働時間に依て決定せられる交換價値の謂である（註六）。

併し乍ら、相對價値なる名辭は他の異なる意義に解せらるゝ場合がある。即ち「二種の貨物の相對價値が變動する。而して吾人は、變動がその何れの上に起つたかを知らんと欲する」と（註七）、その相對價値を、リカアドオは後に至つて「比較價値」と稱して居る。この意味に於ける相對價値は互に交換せられる貨物の比例を言ひ表すにすぎないのであつて、この比例の變化は最初の意義に於ける「相對價値」の變化に由て惹き起されることもあれば、又、この意味の相對價値の變化に拘らず、その交換比率は依然として同一なる場合もある。然るにリカアドオに從へば、「一方、貨物の現在價値を靴、靴下、帽子、鐵、砂糖、其他有ゆる貨物と比較すれば、我々はそれが依然是等凡ての物の正しく同一數量と交換せらるゝことを發見する。然るに、他方の貨物を同じ諸貨物と比較すれば、我々はそれが是等諸貨物の凡てのものに對する關係に於て變化したことを發見するのである。此場合我々は變動が此貨物に存して、それと比較された諸貨物に存せぬものと推斷し、大概誤りはない。若しも更に細かに此等諸貨物の生産に關係ある一切事情を吟味して、靴、靴下、帽子、鐵、砂糖其他の生産には正に同一量の勞働資本が要せらるゝが、其相對價値の變動した該一貨物の生産には以前と同一量を要せぬことが發見せらるれば、蓋然は變じて確實となり、我々は變動が該一貨物に存することを確めると共に、其變動の原因をも發見するのである」（註八）。故にこゝに於けるリカアドオの相對價値は一貨物交換價値の現實的具現なる意味に於ける相對價値に非ずして、その貨物自體の中に實現されて居る勞働時間を意味する絶對價値の意義と觀なければならない。

『原理』第二節に於て、リカアドオはその研究對象たる交換價値の意義を稍〻精細に限定して居る。曰く、「予が讀者の注意を惹かんと欲する研究は、貨物の相對價値變動の結果に關するものであつて、其の絶對價値の變動に關するものでないから、人間勞働の樣々なる種類に對して加へらるゝ比較的評價の程度を吟味することは、余り重要の事ではあるまい。假令始めはそれに如何なる不平等があり、一種の技能を修得するには他の場合よりも工夫熟練又は時間を要することが幾許であつたとし、

ても、それは時代から時代に亘つて幾ど不變であるか、少くとも年々の變動は言ふに足らざるものであるから、短期間に對しては、諸貨物の相對價値の上に殆ど影響を及ぼすことがないと結論して差支ないのである」と(註九)。

第六節　不變の價値尺度に就て　に於て又次の如く述べて居る。――「予は一貨物には一、〇〇〇磅を要する丈けの勞働が投ぜられ、別の貨物には二、〇〇〇磅を要する丈けの勞働が投ぜられてあるから、一方には一、〇〇〇磅の價値があり、他方には二、〇〇〇磅の價値がある筈だとは謂はぬ。予はただ此等貨物の相互に對する價値は、一に對する二であり、而して二物は此比率を以て相交換されるであらうと謂つたのである。此學説の當否如何に取つては、此等の貨物の一方が一、一〇〇磅に賣れて、他方が二、二〇〇磅に賣れるか、或は一方が一、五〇〇磅に賣れて、他方が三、〇〇〇磅に賣れるかは、問ふに足らざる所である。此問題は今は論ぜぬ。予はたゞ是れ丈けのことを主張する。曰く、『彼等の相對價値は其生産に投ぜられた勞働の相對量に由て支配せらるゝであらう』と(註一〇)。

これ等は、リカアドオの研究對象が貨物の相對的比例關係のみに在る事を明示する。彼にありては、一貨物に投ぜられたる勞働量と他貨物に投ぜられたる勞働量との相對的關係、二者の比率が、相對的價値である。

然るに『原理』第二十章　價値と富と。其の差別を示す諸性質　に於ける彼の價値概念は當に一變する。曰く、「アダム・スミスは謂ふ、『人の貧富は、その能く人間生活の必需品、便宜品及び娯樂品を享受し得るの度合如何に由るものである』と。

されば、價値は本質的に富とは殊なるものである。何となれば、價値は潤澤に由て定まるものでなくて、生産の難易如何に由て定まるものだからである。製造工業に從事する一百萬人の人の勞働は、常に同一の價値を生産するが、併し必しも常に同一の富は生産せぬ。機械の發明により、熟練の進歩により、分業の改善により、若しくは一層有利なる交換を行ひ得べき新市場の發見によつて、社會の或狀態の下に於ける一百萬人の人は、別の狀態の下に於て生産し得べき富、即ち「必需品便宜品及び娯樂品」の二倍又は三倍の數量を生産するかも知れぬが、併し乍ら、價値は其爲めに少しも增加せぬであらう。何となれば、有ゆるものの價値は、其生産上に於ける難易に比例して、即ち換言すれば、其生産上に使用せらるゝ勞働量に比例して騰落するものだからである。……絶えず生産の利便を增進せしむるは、啻に國富のみならず、將來の生産の力をも增加せしむる所以であるけれども、其の同じ手段に依つて、我々は以前に生産せられた貨物の中の或物の價値を絶えず減少せしめるのである。經濟學上の誤謬の多くのものは、此問題に關する誤謬から生じて居る。即ち富の增加と價値の增加とを、同一事を意味するものと解することから、又價値の標準尺度を成すものは果して何なるかに關する根據なき觀念から生じて居るのである」と(註一一)。

是に由つて、リカアドオが、一貨物の價値を該貨物に含まるゝ勞働量と考へて居ることは明白である。こゝに云ふ價値の意義は、諸貨物の相對的關係、比率の意味ではなくして、寧ろその前提として存在すると考へらるゝ絶對的意義の交換價値即ち眞實價値である。又曰く、「獨り不變なる貨物は、それを生産する爲めに、常に同じ辛苦と勞働との犧牲を必要とする貨物のみである。我々は斯

る貨物を全く知らぬけれども、姑らくそれを知るものとして假設的に之に就いて論じ、且つ説いて差支ないし、又從來採用せられ來つた諸標準の悉く絶對的に無資格なることを明證することに依つて、我々の經濟學の智識を進歩せしむることを得るのである」（註一二）。

「一切の生活必需品及び快適品の正さしく同一數量を有する二つの國に就いて、此二國は均しく富めるものであるが、併し其の各國の富の價値は、其生産の比較的難易に由て決せられるであらうと言つて好い。と云ふのは、若しも一個の改良せられた機械が、我々に勞働を追加することなしに、一足でなくて二足の靴下を造ることを得させたならば、羅紗一ヤアドと交換に二倍の數量が與へられる筈だからである。若し同樣の改良が羅紗の製造上にも行はれたならば、靴下と羅紗とは以前と同一の比例を以て相交換されるが、併し兩者共に其の價値は低落して居るであらう。何となれば、之を帽子や金や又は其他一般諸貨物と交換するに當つては、元の二倍量を與へなくてはならぬからである」と（註一三）。

交換比率は同一であり、然かも價値は低落して居ることを明言するリカアドオのこの場合の意義は、二貨物間の交換比率の觀念とは全然關係がないのである。

「セエ氏は、其著作『經濟學』の最近の版たる第四版に樣々の訂正を加へて居るにも拘らず、不思議に其の富と價値との定義を謬つてゐるやうに見受けられる。氏は此の二の言葉を以て同義なるものと爲し、人は、其所有物の價値を增し、その貨物を支配し得ること豐富なる程度に比例して富有となるものと考へて居るのである。氏の謂はく『されば所得の價値は、其方法の如何は問はず、それが生産物のより大なる數量を獲得し得る場合に增加するものである』と。セエ氏に從へば、若しも羅紗生産の困難が倍加し、從つて羅紗が以前に比して二倍量の貨物と交換されることになつたならば、其の價値は倍加するものである。是に對しては、予は全然同意見である。然るに、若しも諸貨物の生産上には何か特殊の利便があり、而して羅紗生産の困難は增大することなく、從つて羅紗は前と同じく、諸貨物の二倍量と交換せらるゝならば、セエ氏は依然として羅紗の價値は倍加したと謂ふであらうが、此問題に對する予の見解に從へば、氏は須らく羅紗は其の舊價値を保ち、彼の諸貨物の價値は舊に比して半減したと謂はなければならないのである」（註一四）と云ふリカアドオの所説によれば、明らかに彼の價値は投下勞働量の意義である。一貨物の生産に必要なる勞働量に變化なき限り、他貨物との交換比率の增減に關係なく、全く該貨物の價値は不變である。即ち彼はまた次の如く述べて居る。

「茲に結論を下していへば、諸貨物の眞實の豐富と低廉との結果として消費者階級全體に歸する所の利益を尊重せんと欲することに於て、予は決して人後に落ちないものではあるが、一貨物の價値を、それと交換せらるべき他の諸貨物の多少に由て測定するの一事に於ては、予はセエ氏に同意することを能はざるものである。予は頗る高名なる著作家デステュット・ド・トラシイ氏と同意見なるものである。氏の謂はく『或る一物を測定するといふことは、我々が比較の標準として、單位として採用する同じものの一定量と之とを比較することである。一の長さ、一の重量、一の價値を測るといふこと、即ち之を確めるといふことは、米突（メエトル）、瓦（グラム）、法（フラン）、一言にしていへば、同じ種類の單位の幾倍が

それに含まれてゐるかを見出すことである。』法は法と測定せらるべき物とが兩者に共通なる或る他の尺度に還元せられ得る場合の外は、法の造らるる同じ金屬以外は何物に對しても價値の尺度たるものではない。此事は予の信ずる所によれば、爲し得られる。それは兩者が共に勞働の結果であるからであつて、又從つて勞働は、以て兩者の眞實價値並に相對價値を秤量し得べき共通の尺度たるものである」と（註一五）。

リカアドオは、內心に於ては、抽象的なる絕對價値を想定し、その相對價値との關係を明瞭にせんと意圖したるものの如くであるが、表面的には、以上の諸引例の示す如く、未だ勞働の抽象性を正確に論ずることなく、彼の眞實價値と相對價値とは雜然と述べられるまゝであつて、其の間の關係が明確でない。從つて彼の交換價値がその孰れであるかに就ても極めて曖昧である。

註

一　小泉教授譯『經濟學及課稅之原理』（岩波文庫版）七頁、マカロック版七頁、コンスタンチオ佛譯版五六頁

二　小泉教授譯同書　八頁、マカロック版七頁、コンスタンチオ佛譯版六—七頁

三　小泉教授譯同書　八—九頁、マカロック版一〇頁、コンスタンチオ佛譯版七頁

四　K. Marx, Theorien über den Mehrwert, Vierte Aufl. Bd. II, Erster Teil, S. 9.

五　小泉教授譯同書　一三頁、マカロック版一三頁、コンスタンチオ佛譯版一二頁

六　K. Marx. Theorien über den Mehrwert, Vierte Aufl. Bd. II, Erster Teil, S. 9.

七　小泉教授譯同書　一三頁、マカロック版一三頁、コンスタンチオ佛譯版一二頁

八　小泉教授譯同書　一三—一四頁、マカロック版一三頁、コンスタンチオ佛譯版一二頁

九　小泉教授譯同書　一七—一八頁、マカロック版一五頁、コンスタンチオ佛譯版一五—一六頁

一〇　小泉教授譯同書　四一—四二頁、マカロック版三〇頁、コンスタンチオ佛譯版三四頁

一一　小泉教授譯同書　二六八—二六九頁、マカロック版一六五—一六六頁、コンスタンチオ佛譯版二四七—二四八頁

一二　小泉教授譯同書　二七〇頁、マカロック版一六六頁、コンスタンチオ佛譯版二四九頁

一三　小泉教授譯同書　二七二頁、マカロック版一六七—一六八頁、コンスタンチオ佛譯版二五一—二五二頁、

一四　小泉教授譯同書　二七四—二七五頁、マカロック版一六九頁、コンスタンチオ佛譯版二五六頁

一五　小泉教授譯同書　二七八—二七九頁、マカロック版一七一頁、コンスタンチオ佛譯版二五九頁

三

リカアドオ價値概念の以上の如き不明確を最初に指摘せるものは、サミュエル・ベエリイであつた。彼は一八二五年匿名にて著せる A critical dissertation on the nature, measures, and causes of value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers. に於て、辛辣且無遠慮にリカアドオの此點を非難して居る。ベエリイの批判は果して肯綮に中つて居るか否か。今姑く、ベエリイ自身の價値論と、それを基礎とするリカアドオ批判とを聽かなければならない。

理路の透徹、頭腦の明晰なる點に於て、ベエリイは正にリカアドオの好敵手である。ベエリイに從へば、一つの言葉は必ず一つの意義に解されねばならない。然かせざるところに一切の思想の混亂は伏在する。「極めて重要且困難なるこの問題（價値論）の基礎は、リカアドオ並に其の學徒に於ても、未だ精細綿密なる注意を以て檢覈せられて居ないのである」（註一）。「經濟學に關する著作者は、

一般に價値なる名辭の簡單なる定義と、それに依つて示される性質の二三の區別とに滿足し、その爲め、かなり曖昧にこの言葉を用ゆるに至つて居る。この價値なる名辭によつて表現される觀念の本質、若しくはその意義を完全に理解し、以て直接認識し得る如きその諸影響を明確に考察論議せるものは一人としてなかつた。然かも、豫備的研究の斯くの如き欠如は、遂に意見の相違と思想の混亂とを惹起したのである」(註二)。

價値の尺度に關しても、彼に從へば、その觀念並に表現の兩樣に於て猶ほ多くの曖昧が殘つて居る。「價値計量と云ふことは、一見極めて單純、正確、明瞭なる表現であつて、爲めにその意義の研究は無用の如くに想はれる。その結果、この名辭は、明瞭に一定の意義に解せらるゝことなくして使用せられ、或は、種々なる觀念が無意識、無差別に交錯し、又、現に想像的に存在するにすぎざる類推概念が、異論なき前提若しくは一般に認められたる假定として考へらるゝに至つた」(註三)。

價値の諸原因も亦均しく看過せられて來た。この諸原因の本質、若しくはその作用の態樣に關する研究が不充分であつた爲、重大なる誤謬が冒されること屢〻であつた(註四)。加之、價値の測定、並に價値の原因探究なる二個の概念が屢〻混同せられ、或は、一概念より他概念へ絶えず變動し、或は、兩概念に對する共通なる名辭を使用するの結果は、益〻精緻なる思索を困難ならしめて居る(註五)。

斯くして、「經濟學はまだ一個の正規且完全なる建築物として出現することは出來ない。美麗なる建築物として吾人の眼を眩惑するためには、先づ塵埃を除去し、土地を掃拭し、一切の無益厄介なる附屬物を取り拂はなければならない」と(註六)。

ベエリイによれば、リカアドオは分析的才能の欠如の爲めに未だこの盤根錯節を整理することが出來なかつた。「彼の驚く可き創造力と理智力とは、之を認容しなければならないが、然かも、彼に對して與へられて居る光輝ある讃辭は、彼の眞の功績を越ゆること遙かに遠きものではなからうか。……彼の思想の發展は屢〻不完全であり彼の推理法は省略的であり、且支離滅裂の樣に思はれる。……リカアドオの諸著作に屢〻表れるこの不明瞭は、或は、彼の文體に歸せられ(註七)、或はバラドックスを好む彼の心情に歸せられた。……乍併、彼の理論の欠陷にはより深い原因がある。二三の基本觀念に於ける本源的錯綜と紛糾とがそれである。彼は終生この混亂より脱出することが出來なかつた。……リカアドオは驚くべき論理的能力を有して居たが、微細なる分析力には惠まれて居なかつた樣である。故に、リカアドオの諸著作は次の命題の極めて適切なる例證となるのである。即ち「最も鋭き推理力と雖も、名辭、命題の絶えざる分析と天才哲學者の有するが如き理知的作用の强き自覺とを伴ふに非んば、重大なる誤謬を避くるに充分ならず」と。……リカアドオは、己れの論理的能力によつて、明瞭に意識せる場合は概して一語を一意義に用ひたけれども、意義の變化、或はその曖昧多義を意識しない場合には、分析力の欠如のために、意義の偏差を歪す機會を失し、その結果、極めて嚴正なる彼の演繹は益〻彼を邪路に導いたのである。故に、リカアドオの嘆美者等が、眞理の嚴肅性を越えてまで彼を激賞するのは、恐らく、リカアドオの究極の名聲の爲に、又、彼の耕したる經濟學のために、却つて不幸である」と(註八)。然らば、ベエリイは自ら如何なる基礎

理論を以てリカアドオの價値概念を整理せんとするか。先づ彼は價値本質論より出發する（註九）。

ベェリイは、アダム・スミスの「一物の價値はそのものの所有によつて獲得する他物の購買力である」と云ふ價値の定義を本質上正しいものと認め、一切の推理の基礎をこゝにおく（註一〇）。何故にスミスの定義は正しいか。

曰く、「價値とは、畢竟、あるものに對する評價を意味する。換言すれば、心理上に生ずる一つの結果を示すのである。從つて、價値は對象物に屬する一つの性質と見ることが出來る。乍併、經濟學者の用ゆるが如き價値は、單なる一個の評價感覺ではない。經濟學に於ける價値なる特殊の感覺が生じ得るのは、たゞ數個の對象物が撰擇若しくは交換の主體として一緒に考察される場合のみである。今二物を以て撰擇若しくは交換の主體とする時、吾々は始めて正確にこの感覺を表現することが出來るやうになる。例へば、Aは吾々の評價に於てBの二倍であると云へる。乍併、斯る評價の表現は積極的ではなくて、相對的である。もつと正確に云へば、吾々の評價に於けるAとBとの相互關係の表現である。斯ゝる關係は、數量によつてのみ表示され得る。故にAの價値は、そのものの所有が齎らすBの購買力と云ふことが出來る」（註一一）からである。

スミスの定義に從へば、價値概念の生ずる爲には比較さるべき二物が本質上存在しなければならぬ。一物の價値を以てその購買力とするならば、購買の對象物が必ず存在しなければならない。其の結果、價値は積極的、若しくは內在的なるものを表示するものではなくて、單に、交換物としての二物間の相互關係を示すにすぎぬ。

斯く價値を二物間の關係とする時、價値の變動は二物に對して同時に起らなければならない。比較される一物の價値は變動するが、他物の價値は變動しないとは云ひ得られぬ。AのBに對する價値は變動し得るがBのAに對する價値は變動し得ない、又は、AのBに對する價値は騰貴するが、BのAに對する價値は變動しないと考へるのは、全く不合理である。恰も、地球の太陽からの距離は變動し得るが、太陽の地球からの距離は變化し得ないと云ふのと同じである。今、A、B二貨物あり、その價値相等しとする。然るに、ある事情の爲めに、Aの生產に要する勞働量は以前の二倍となるに反し、Bの生產に要する勞働は依然として同一である場合には、AのBに對する價値は二倍となるであらう。然しBは同一勞働によつて生產されて居るけれども、その價値は變化する。BはAの二分の一としか交換されないからである。

斯る價値の相對的性質の說明に對する反對者は次の如く言ふかも知れない。――『Aの價値がBの價値に等しいと云ふ場合、この表現は各貨物に於ける內在的、絕對的性質を意味する。然からざれば、此等二物の等價値を確認することが出來ないからである。價値なる名辭を以て單にAB間の關係を示すに過ぎぬとするならば、それ等の等價値を云々することが既に不合理なことではなからうか』（註一二）と。

乍併、ベェリイに從へば、「Aの價値がBの價値に等しいと云ふときには、AはBと交換されるであらうと云ふ單なる事象以外何物をも意味せず、唯だ二物間の關係を表示するに過ぎないのである。故に、Aの價値はBの價値に等しいと云ふ命題は全然正確とは云へぬ。それが正しいのは、この二

貨物のみを考慮して、その他の貨物とは關係のないものとして論ずる場合に限られる。この命題を論ずるとき、その他の貨物、特に貨幣との關係を考慮するのが常である。即ちこの命題は、AもBも共に第三の貨物、若しくは一般の貨物と同關係に在ることを示す。内在的、且絶對的なあるものとして價値概念が生ずるのは、他の貨物、若しくは貨幣との不易の關係からである。交換貨物として二物を比較する場合、その貨物の相關關係、及びそれ等と貨物との關係てふ二つの關係が、吾々の比較の中に必然的に混在する。絶對價値が存在する樣に想はれるのは、第二の關係がある爲めである。何故なれば、この第二の關係は、吾々の直接の研究對象たる第一の關係より獨立して居る如くに考へられるからである。洵に吾人の比較せんと欲する二貨物に於ける相互關係を確認し得るのは、一般的にそれ等と第三の貨物との關係に由つてである。A、Bの價値が相等しいか如何うかを知らうと欲するならば、概して、Cに於けるそれ等の價値を見出さなければならないであらう。而して、Aの價値はBの價値に相等しいと確言する時、AとCとの比率はBとCとの比率と相等しいと謂ふことを意味するにすぎないのである」（註一三）と。

ベエリイは以上の如く價値の本質を論じた後、斯る價値の相對性については未だ嘗て明確且統一的に論ぜられたることなしと謂ふ。例へばリカアドオである。彼はスミス博士の價値の定義を認めながら、常に等量の勞働量を要求するが如き貨物はその價値不變なりとの命題を提示して居る。乍併、價値が單に關係を示すものであるならば、この命題は眞理たり得ない。この貨物は何に對して不變の價値を有するのであらうか。相互關係にあるものは何であるか。總ての貨物に對して同價値なのであらうか。そう言ふ場合もある。それで正しいのである。が然し、それは決して不變の勞働量に由つて生産せらるゝが爲めではない。何故なれば、その勞働量が不變であつても、他貨物に於ける勞働量が增減するならば、この貨物と他の總ての貨物との價値關係は、リカアドオ自身の原理に從つて、直ちに變動するからである。例へば、穀物は常に生産の爲めに同一勞働量を要求するが、他の總ての貨物は以前の二分の一の勞働を以て生産せらるゝに至るものとするならば、穀物の價値は依然として同一であるとは決して云ひ得ないのである。價値は二貨物間の關係を示すものであるから、其は一物のみに影響するが如き原因より生ずることなく、二個の原因即ち關係ある二物に相互に作用する二個の原因より生ずるに違ひないと云ふ事實を論證する必要はないのである、然かも、リカアドオはこの本質的條件を看過した。價値の不變を論ずる時、彼は價値決定に關する原因の一半を忘却して居る。勞働量が價値を決定すると云ふ彼の學說を姑く許容するとしても、そは決して唯だ一方の貨物の生産に要する勞働量ではなくて、比較される各〻の貨物の生産に要する勞働量である。二貨物の價値即ちその相互關係は一方の生産に必要なる勞働量の變化によつて必然的に變化するに違ひないのである。洵にリカアドオ自身も、その理由は姑く措き、不變の價値を有する貨物を發見し得ずと主張する點に於て、この見解に一致して居る」と（註一四）。

ベエリイの命題は、彼の自ら稱する如く、一貨物に影響する諸原因が不變であつても、それに比較される有ゆる貨物に影響する諸原因が變動するならば、この貨物の價値は不變ではあり得ないと謂ふのである。ベエリイによると、上述の理由によつて、「リカアドオは勿論、マルサスもド・クイ

ンシイも亦同じ誤謬に陷つて居る。マルサスは『價値尺度論』に於て、絶對價値又は自然價値と名目價値又は相對價値とを區分して居るけれども(註一五)、全體から云つて、彼の價値概念は內在的、絶對的なるものである。この意味に於て、彼も亦、リカアドオと同じ誤謬を冒した。絶對價値なる名辭の不合理なるは、恰も絶對距離なるそれの不合理なると同一である。リカアドオの嘆美者ド・クインシイに於ては、その誤謬はより明白である」と(註一六)。

ベエリイは、價値の本質に關する此の研究の結果を次の如き諸命題(註一七)に要約して居る。

（一）價値なる名辭が三貨物間の關係を示す限り、一貨物は、ある他貨物との明瞭若しくは潛在的なる關係なくしては、價値を有し、或は價値を變ずるとは言ひ得ない。

（二）三貨物間のこの關係は、他貨物に關して變動することなくして一貨物に關して變動することは出來ない。

（三）一貨物の價値は、ある他貨物の數量に由つてのみ表示され得る。

（四）A貨物の價値の騰貴は、この貨物の同じ數量が、B貨物――Aの價値はこの貨物との關係に於て騰貴すると云はれるが――の、以前よりより大なる數量と交換せらるゝことを意味する。

（五）Aの價値の下落は、その同一數量が、Bのより少い數量と交換されることを意味する。

四

以上の如き價値本質論を基礎として、ベエリイはスミス、リカアドオ、マルサス、ド・クインシイに於ける眞實價値と名目價値との區別を非難する。たゞリカアドオに於て、果して眞實價値と名目價値とは嚴別され、且眞實價値がその價値論の基礎となつて居るかどうかは、異論の存するところである(後段參照)。ベエリイ自身も、リカアドオに於ては眞實價値の觀念が幾分不明瞭であり、且間接的態樣に於て表はされて居ることは之を認めるが、依然として、この二者を區別し、根本に於て眞實價値を認容したと云ふ點に於ては、スミス、マルサスと同樣であると考へて居る(註一八)。

然るに、ベエリイによれば、前述せし如く、價値の本質は相對的のものであるから、かゝる價値の區別は單に任意且無益無用の差別に過ぎぬ。一貨物の價値は他貨物との交換關係を示すものだから、比較される貨物に從つて、貨幣價値、穀物價値、羅紗價値と云ふことが出來、從つて價値の種類は多種多樣であつて、又總ての價値は孰れも均しく眞實價値であり、名目價値なのである。從つて、これ等二種の名辭を使用することは、決して理論を明確ならしめる所以でなく、却つて、曖昧模糊と無用の議論とを齎らすのみである(註一九)。

猶ほ、價値の本質上、異れる時期に於ける貨物の比較は不可能なことである。「同時期の貨物のみが相互に交換せられ得るものであるから、價値は斯る貨物間のみの關係である。一貨物の價値を一時期と他の時期とに於て比較するのは、單に、これ等の異れる時期に於ける他貨物との關係の比較に過ぎない。其は決して一時期に於ける何等かの內在的、獨立的性質と他の時期に於けるかゝる性質との比較ではなくて、この二つの異れる時期に於て相互に交換される貨物の比率の比較即ち相對的數量の比較である」と(註二〇)。然るに、スミス、リカアドオ、マルサスは共に、勞働を仲介とし

てこれ等貨物價値の積極的比較を可能と見て居る。然かも、ベエリイに從へば、「A、Bに於ける生産勞働の積極的數量に變化があつても、比較的數量に變化なき限り、これ等二貨物の相互價値には何等の影響もない。これは、恰も生産勞働の積極的價値に變化があつても、これ等價値間の比率に變化なき限り、何等の影響もないのと同一である」と（註二一）。

次にベエリイは價値尺度論を述べ、リカアドオの謂ふ價値の尺度なる用語に伏在する思想の混亂を指摘する。

ベエリイによれば、價値尺度論は經濟學の諸著作に於て猶ほ漠然たる態樣をとるにすぎず、且恐らくは、誤謬と混亂との生ずること、これより甚しきものはないのである。先づ尺度なる名辭は如何なる意義を有するか。この名辭には種々なる類似概念がある。その爲めに、殆んど總ての著作者が惱まされ來つた。通常、價値を測定することを以て距離、重量を計量することと同一義に解し、從つて、斯くの如く價値を測定する爲めには、不變なる價値の對象がなければならぬと想像せられて來た。乍併、價値測定に於て實際に知り得ることは次の事實に過ぎない。即ちAのBに對する價値、並にBのCに對する價値を知つて居る場合、AとCの相互價値及び他の總ての貨物に對するその比較的購買力を知ることが出來るのみである。然かも多くの經濟學者は、是に滿足せずして不變の價値尺度を求めた。一貨物が完全なる價値尺度たる爲めに不變の價値を有さなければならぬと云ふ當爲の觀念程、この研究に於ける不注意の著しい例は他にないのである。斯る觀念は、疑問とされることなくして一著作者より他著作者へ傳はり、而してその誤れる推論並に根本的なる誤認に就いて何等の疑惑をも惹起することなくして採用せられ來つた。然かも、かゝる推論の不合理なるは、前述の如き價値の本質を理解せるものには明白であらう。リカアドオは不變の價値尺度、絶對的價値を想定した。然るに「原理」第一章第六節に於て、次の如く論ずる。――「諸貨物の相對價値が變動した場合には、其の何れの眞實價値が下落し、何れの眞實價値が騰貴したかを確かめる手段を有することが望ましいであらう。而して此事は、諸貨物をば、交々其自身他の諸貨物の蒙る變動を全く免れてゐる、或る不變の標準價値尺度と比較することに依て始めてこれを行ふことが出來る。併し乍ら、其自身價値の確かめらるべき諸物と同じ變動に暴露せられてゐない貨物といふものはないから、即ち其生産に要する勞働の增減せぬといふものはないのであるから、斯る尺度を持つことは不可能である」（註二二）と。茲にリカアドオに於ける思想の混亂がある。相矛盾する二個の概念が含まれて居る。これ全く價値の本質に對する誤認と眞實價値に就ての彼の諸觀念とに依て誤り導かれたる結果である。又、彼は生産勞働の數量の不變と價値の不變とを絶えず同一視してゐるのである。洵にリカアドオは、貨物の價値を測定すること、價値の諸原因の變動したる貨物及びその變動の程度を確認することの、全く異つた二個の觀念を混同して居る（註二三）。

以上はリカアドオに於ける價値概念に對するベエリイの批判であるが、かゝる批判は必然的に、果してリカアドオの價値論は價値原因の説明であるか、或は價値尺度の説明であるかの問題を誘起する。即ち貨物の交換價値又は相對價値――一貨物の幾許量が他の貨物と交換せらるゝやの法則は

その各自に投ぜられたる比較的勞働量之を決すとのリカアドオの根本命題は、價値原因論であるか、價値尺度論であるか、三者の單なる混淆にすぎざるものであるか、或はその間に統一的說明を基調とするやの問題が生ずる。この問題に就てベエリイの解釋と批判とを聽けば大略次の如くである。

「經濟學の諸分科の中に於て、目的の不確實と言辭の曖昧とに惱まされること、價値の尺度と原因を研究する分科程甚しきものはない。一見、價値の尺度を求めると云ふことと原因を求めるといふこととの區別は明瞭であつて、この二個の觀念の混亂さるゝ危險は全くない樣に考へらるる。然かも、事實は、これ等の觀念及びその表現せられる名辭に代位、錯交、混亂があり、その間に存する差異も全く意識されなかつた。即ちベエリイに從へば、リカアドオも亦、この問題に於ては、思想の混亂に陷つて居る。ド・クインシイに從へば、リカアドオの學說は價値原因の說明であり、價値の標準には關係なきものであつて、事實、彼は經濟學上主要の問題は獨り價値原因論にのみ存することを力說これ努めた。ベエリイは、斯くの如くリカアドオを以て一切の曖昧より逃れ得たりとなす所論の誤謬を指摘する。曰く「『經濟學及び課稅の原理』を瞥見すれば、リカアドオも亦他の經濟學者と等しく誤謬に陷つてゐることがわかるであらう。且ド・クインシイがリカアドオの價値原因は價値尺度論に關係なしと云ふのは驚くべき獨斷である。リカアドオの價値論は、時として原因論であり、時として尺度論であつて、是は明らかに彼がこの二個の觀念間の差異を明確に把握し得なかつた事實を證明して居るのである」と。

ベエリイは、リカアドオ自身の言辭を引用して這般の問題を闡明する。リカアドオは『原理』第一章第一節に於て「一貨物に投ぜられたる勞働量は多くの事情の下に於て、正確に他物の變動を指示する不變の標準たるものである」（註二四）と云ひ、又その第二節に於て、勞働は總ての價値の基礎であると述べた後、勞働を以て一切貨物の交換價値の眞尺度となすアダム・スミスの言葉を脚註に引用して居る。猶ほ同書二十章に於て斯う云つて居る。――「法（フラン）は、法（フラン）と測定せらるべき物とが兩者に共通なる或る他の尺度に還元せられ得る場合の外は、法の造らるゝ同じ金屬以外は何物に對しても價値の尺度たるものではない。此事は予の信ずる所によれば、爲し得られる。それは兩者が共に勞働の結果であるからであつて、又從つて勞働は以て兩者の眞實價値並に相對價値を秤量し得べき共通の尺度たるものである」（註二五）と。然かもリカアドオは斯る學說を支持する爲めに、勞働は價値の原因なりと云ふデスティット・ド・トラシイの章句（註二六）を引用して居る。勞働は價値の尺度なりと云ふ命題を確認する爲めに、勞働は價値の原因なりと云ふ章句を援用したこの一事こそ、リカアドオに於ける思想の混亂を最も的確に明證し得るものである。斯くして、價値の標準若しくは尺度として價値を說くと云ふが如きことはリカアドオの夢想だにせざりしところであると云ふド・クインシイの主張は、以上の如きリカアドオ自身の言辭によつて反證されるのである。

「然かもリカアドオ學說の信奉者は、言辭の矛盾若しくは曖昧の責より彼を免れしめんとして次の如く論ずることが出來るであらう。――「眞に勞働が價値の唯一原因であるならば、其は又從つて價値の正確なる尺度若しくは標準たるに違ひない。かくの如くこれ等二つの事情は必然的に相互關聯するものであるから、價値を何れの意味に解しても同一であらう」と。

洵に勞働が價値の唯一原因であるならば、二貨物の價値を相互に要する生産勞働量から演繹することは常に可能である。而してこの意味に於て、勞働量は同時に價値の原因であり、尺度である。乍併、斯くの如き場合であつても、言辭の亂用の罪は免れないのである。且勞働量を以て價値の原因であるとしても、其が尺度としても役立つか如何かは疑問である。この點に就ては、ド・クインシイの次の言を引用せんとするものである。――「價値論が價値の尺度論として唱へられたものならば、吾人はその價値の尺度が容易に適用されることを要求する。然かも、その價値尺度は明らかに適用され得ないのである。何故なれば、Aの生産に投ぜられた勞働量は、多くの場合、確定するに極めて困難であるからである。そは全く不可能と云つてもよいのである。爾かく實際に適用し得ざるが如き價値の尺度は無價値である」（註二七）と。

ベェリイは、斯くの如く、價値の原因と尺度との差別を論じたる後、再び基本的論究に歸つて價値原因の意義を論ずる「價値の原因に關する研究に於ける第一の對象は事實上に於ける價値原因の意義、即ちその眞の本質如何を確認することであらねばならぬ。予は既に『批判』第一章に於て、價値は二物間の關係であるけれども、意思の決定に於て表現せられる感覺即ち心の狀態を意味すると述べた。かゝる感覺は交換せらるべき貨物と關聯する種々なる考慮の結果である。從つて、價値原因の研究は、事實上人間心理に絶えず影響するこれ等外界の事態の研究である。これ等外界の事情が即ち價値の諸原因である。然らば貨物の交換量を確定する諸原因とは如何なるものであるか。ベェリイによれば、その諸原因は、貨物の種類によつて相異するものであつて、彼は大體、交換せらるべき一切の貨物を次の三種に區別する。

（一）　自然的事情による獨占貨物
　　a、一方的利益の場合
　　b、双方的利益の場合
（二）　數人がその生産に於て他人よりより大なる便益を有するが如き貨物
（三）　無制限の競爭がその生産に於て行はれる如き貨物

彼はこの三個の場合に應じて、各〻その價値の原因たるものを擧示して居るが、その說明に幾多の創見の見るべきものがあるとは云へ（註二八）、其は價格構成條件として吾人の知悉せるものである（註二九）。

註

一　S. Bailey, A critical dissertation. pre. III-IV
二　S. Bailey, Ibid., pre. V
三　S. Bailey, Ibid., pre. VI
四　S. Bailey, Ibid., pre. VII
五　Ibid., pre. VII S. Bailey,
六　S. Bailey, Ibid., pre. XII
七　マーシャルも亦「リカアドオが一八二〇年十月にマルサスに言つてゐる通り、彼には『文才がなかつた』」と述べて居る（Principes of Economics, p. 813）。

八　S. Bailey, op. cit., pre. XIV-XXI

九　森耕二郎氏「リカアドオ價値論の研究」二〇六—二一二頁參照

一〇　S. Bailey, op. cit., p. 4

一一　S. Bailey, op. cit., pp. 3-1

一二　S. Bailey, op. cit., p. 7

一三　S. Bailey, op. cit., pp. 7-9

一四　S. Bailey, op. cit., pp. 10-20

一五　Malthus, The measure of value stated and illustrated, p. 1. et seq. quoted by Bailey, op. cit., p. 23

一六　S. Bailey, op. cit., pp. 23-31

一七　S. Bailey, op. cit., pp. 33-34

一八　S. Bailey, op. cit., p. 38 pp. 232 237

一九　S. Bailey, op. cit., pp. 38-39

二〇　S. Beley, op. cit., pp. 71-73

二一　S. Bailey, op. cit., p. 93

二二　小泉敎授譯「經濟學及課稅之原理」三八頁、マカロック版二八頁、コンスタンチオ佛譯版三一—三二頁

二三　S. Bailey, op. cit., pp. 94-138

二四　小泉敎授譯「經濟學及課稅之原理」一〇頁、マカロック版一一頁、コンスタンチオ佛譯版九頁

二五　小泉敎授譯同書　二七九頁、マカロック版一七一頁、コンスタンチオ佛譯版二五九頁

二六　デスチュット・ド・トラシイ氏の謂はく「獨り吾人の肉體的並に精神的能力のみが吾人の本來の富なることが確實であるから、是等能力の行使、即ち何等かの種類の勞働は、我々の唯一の本源的財資であり、又彼の凡て吾人が富と稱するもの、即ち最も必要なる諸物、並に最も純粹に快適なる諸物を造り出すものは、常に、此能力行使である。而して凡て是等のものは、之を造り出した勞働をのみ代表するものなること、又若し是等のものにして一の價値を有し、若しくは異なる二つの價値をも有するならば、それは是等のものの源たる、勞働の價値にのみ遡り得るものであることも亦た確實である」と（小泉敎授譯同書二七九頁、マカロック版一七一—一七二頁、コンスタンチオ佛譯版二五九—二六〇頁）。

二七　London Magazine for May, 1824, p. 559, quoted by Bailey, op. cit., p. 177

二八　Seligman, Essays in Economics, pp. 83-86 參照

二九　S. Bailey, op. cit., pp. 162-232.

五

ベエリイは、以上の如く、經濟學上に於ける價値は本質上相對的概念なりとの價値多元論を基礎として、リカアドオの價値論を反駁した。その全駁論が、一は種々異れる意義の價値概念規定に伏在する『矛盾』の指摘と、他は相對價値或は比較價値に非らざる『絶對價値』或は『眞實價値』に對する論難であることは、前述せしところを以て明白であらう。問題は、かゝるベエリイのリカアドオ價値論評が果して肯綮に中つて居るか否かである。リカアドオの價値論に表はれる諸價値概念の解釋に就ては、種々なる異論がある（註一）。けれども、リカアドオが、相對價値を論證せんとしたるにも拘らず、猶ほ絶對價値の概念を混入して居るならば、相對價値のみを認め、絶對價値の無意義を强調するベエリイの批評は、極めて當然と云はなければならない。從つて、問題は、果してリ

カアドオに絶對價値の概念があるか如何うかである。ディール教授に從へば、リカアドオの說明せんと欲するところは、一貨物Aが他貨物Bと比較して幾許の價値を示すかにあつて、Aが其自體幾許の價値を示し、若しくは含有するかには存しない。此點に關して異論を招くのは、リカアドオの語法の嚴密ならざるの罪に歸すべきものであると。即ち曰く「リカアドオは不確實な表現方法によつて多くの不明確を惹起したが、彼の價値理論を如何に解決して居たかに就ては、何等の疑惑も殘さず、且又、この解釋を固執して居たのである。彼は、「眞實價値」又は「不變價値」に就て述べて居る場合も、彼の價値概念に相對的意義を與へた。換言すれば、貨物Aは、それ自體、一定の價値量を表示する或は含有することを說明せんとしたものではなく、Aは他の貨物と比較して一定の價値量を表はすことを說明しやうとした。このことは、彼の著作の主要部分が說明して居るのである」と（註二）。斯るディールの辯護的口吻に反して、我が小泉教授は、リカアドオに絶對價値の概念あると解釋せらるゝ。曰く「固よりリカアドオが詳論するところの相對價値にありて、絶對價値にあらざりしことは論なしと雖も、絶對價値の觀念が全然彼の念頭に存することなかりしと云ふは稍〻過ぎたるを覺ゆ。上記の引用句（第一章第六節　不變の價値尺度に就て、並に、第二十章　價値と富と。その差別を示す諸性質　中の章句、本稿前段參照）に照らして、彼の相對價値論の底に稍〻茫漠たる一種の絶對價値ありたるものと解するは決して不當と評す可からず。たゞ絶對價値を論じて、一定量勞働の體現せられたる貨物は其自體單獨に一定額の價値を有すと主張せんが爲めには、先づ異種の勞働を一の標準勞働に約元して、その一定量を以て直ちに一定額の價値を含み、或は含むものとなさざるべからざるに、リカアドオは輕く此問題を表面に觸れて通過したるを以て、彼の絶對價値論は遂に成形發展するの基礎を得ずして終れりと云ふべきなり」（註三）と。斯る小泉教授の解釋の正しいことは、前述せし如き、『原理』第一章第六節及び第二十章中より摘出したる章句に由て明白である。假令、價値實體と價値形態とを明確に識別すると共に、前者を基礎とする統一的價値論がマルクスに依て達成せられたとは云へ、リカアドオ自身に於ても、その說述の疎漏は姑く措き、絶對價値論の認めらるゝことは異論なきところである。リイプクネヒトも亦次の如く述べて居る。

「茲に明白なことは、リカアドオ自ら貨物の絶對價値を研究せんと欲することに反對これ力めたにも拘らず、彼はその叙述に當つて、絶對的勞働量によつて一定の絶對價値を前提したと云ふ一事である。何故なれば、リカアドオがこゝに眞實價値と云ふものは、絶對價値であり、他商品に對する凡ての關係より乖離せる價値だからである」（註四）と。故に、ベエリイのこのリカアドオ批判には充分の根據があると云はなければならない。たゞ、リカアドオは、嚴格なる意義に於ては、價値の原因として勞働並に時間の要素を認めるに至つたから、價値多元論を基礎とするベエリイの論評はこの意義に解するときは、聊か正鵠を失して居る。ベエリイ自身もこの點に就て次の如く述べて居る。――「洵にリカアドオは、貨物の價値に影響する他の諸原因、例へば、時間、固定資本と流動資本との比例の相異、資本の永續性の不平等と云ふが如き諸原因を明白に認めて居る。然かも、かゝる訂正に拘らず、リカアドオの信奉者等は、依然として勞働量を以て價値の唯一原因として居る。彼等は、一切の價値原因を一に歸せしめやうと欲するが、其は不可能事に屬する。彼等は貨物の相

互交換に於て人間心理に作用する種々なる考慮を看過して居る。此等の考慮が即ち價値の諸原因である」と(註五)。從つて、この點に於けるベエリイの批判は、主としてマルサス、ド・クインシイの價値論に對するものであつて、ある限度に於ては、リカアドオとベエリイとの價値論は正に一葦帶水と云つても差支ないのである。

茲に注意を要するは、後年リカアドオ自身、精確なる價値尺度の求め得べからざることを認め、自說の正しきことを主張するよりも論敵の說の更に謬れることを力說これ努めたと云ふ一事である。即ちマカロックに對しては、「數學的精確を有する價値尺度は之を求め得ない。予の見るところを以てすれば、吾人はたゞ不完全なる尺度中に於て撰擇をなし得るにすぎず、本來完全なる尺度なるものがないから、吾人は斯るものを求むる事は不可能の樣に思はれる」(註六)と述べ、マルサスとの論爭に於ても、略〻之と同樣なる否定的結論に到達して居る。即ち一八二三年八月十五日附のマルサス宛の書簡に於て、「予の貴下に對する不平は、貴下が吾人に精細なる價値尺度を與へたと主張することにある。予は此權利主張に反對して次のことを云はふと思ふ――『予は成就し、貴下は失敗したといふのではなくして、貴下も予も共に失敗した』と。予の自らなし得たと嘗て揚言し、今現に揚言するところは是を以て盡くる。而して若し貴下がこれよりも大なる權利を主張しないならば、予は更に謙讓なる態度をとるであらう。たゞ予は、貴下がその志して居る大目的を成就したりと揚言するのを容認することは出來ない。貴下に答ふるに方つて、予は實に貴下がそれに依つてのみ破らるべしと云つた武器を用ひつゝあるものである。而して此武器は貴下の尺度に對しても、予の尺度に對しても、等しく適用せらるべきものであることを予は告白する。予の謂ふところは、絕對的價値の尺度なるものなしとの議論である。此の如きものは存在しない。貴下の尺度も予の尺度も貨物生產に要せらるゝ勞働の增減より生ずる變動は、之を測定し得るが、勞働と利潤とに歸屬する比例の異同に關しては困難がある。是等の比例の變動は、諸物の相對價値を、之に包含せらるゝ勞働及び利潤の大小に應じて變更する。而して是等の變動に對しては未だ嘗て何等の價値尺度も存しなかつた。而して予はその遂に存しないであらうことを信ずるものである」(註七)と云つた(註八)。然かも、リカアドオの價値論は、彼自身の斯る不滿足にも拘らず、常に不死鳥の如く蘇つて居る。彼の價値論は、之を修正するにもせよ、擴大するにもせよ、或は祖述するにもせよ、極めて重要なる學說として猶ほ現在に鑛鑠と生きて居るのである。「經濟學の建築の基礎はリカアドオに依て置かれて居る。故に人は皆リカアドオを以て、而して、彼の肩の上に建築すべく始めなければならぬ。吾人の學問領域に於ける課題は、他のものを以てリカアドオに代らしめることではなくて、彼の思想を理解し、之を大成することである」(註九)と唱へらるゝ今日、最も痛烈なるこのベエリイのリカアドオ批判も亦、吾人の研究對象として、均しく重要なる意義を有することとなるのである。（一九二八年十二月十三日稿了）

註

一　森耕二郎氏「リカアド價値論の研究」二三一―二四六頁參照

二　K. Diehl, Erläuterungen zu Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft u. Besteuerung. S. 24

三　小泉教授「リカルドオの價値論」（三田學會雜誌十六卷五號）二九頁
四　W. Liebknecht, zur Geschichte der Werttheorie in England, S. S. 34-35
五　S. Bailey, op. cit., p. 232
六　Hollander, Letters to McCulloch, p. 177
七　Bonar, Letters to Malthus., p. 237
八　小泉教授「リカルドオの價値論」（前掲）三〇—四〇頁
九　A. Amonn, Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie, Vorwort IV

附記　本稿は、はじめ、リカァドオの價値論に對するベェリイの批判とマルクスの反批判並にベェリイ、マルサス、ド・クインシイ間の論爭を展望しつゝ、リカァドオ學說の本體論と現象論（二つの發展を辿るつもりで執筆したが、ベェリイのリカァドオ批判だけで意外の紙數を費したので、一と先づ擱筆することにした。他日補論を期す所以である。

前號（第二十二卷第十二號）目次

◉米價は安きか高きか　高城仙次郎
◉近世國家における自然法學說　加田哲二
◉サン・シモンと「十九世紀科學說的研究に關する序論」　小泉順三
◉沖谷十二著「會計學實務」　山田正夫
◉三田學會雜誌第二十二卷後半總目次

●一冊定價金五拾錢　郵稅金壹錢五厘
●半ケ年分金貳圓九拾錢　郵稅共
●一ケ年分金五圓四拾錢
●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切日は發行の前月十日限
昭和三年十二月廿一日印刷納本
昭和四年一月一日發行
毎月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第二十二卷第一號
編輯兼發行者　東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五丁目四十三番地　金子活版所
發賣元　東京市芝區三田貳丁目壹番地　丸善株式會社三田出張所　電話高輪一九二六番
●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す
發行所　東京芝三田慶應義塾內　理財學會